

風浪散人残瑩

宮崎修多

荻生徂徠とともに、膨大な柳沢家蔵版、松会堂刊行『五史』（晋書・宋書・南齊書・梁書・陳書、明南監刊本覆刻、元禄十四〜宝永三年刊）の本文句読と正誤校勘にあたった儒者志村三左衛門楨幹（号楊州）の名は、それをたまた目にするものはあっても、生涯の詳細を知るものは、徂徠に比せば圧倒的に少ないに違いない。元禄期、権をほこった柳沢吉保の邸に集まっていた文人の一人として、今後『楽只堂年録』など柳沢家の資料から、もつと動静の明らかにされねばならぬ人物かと思うのだが、楨幹のその大いなる学力を育てたのが江戸の儒者、風浪散人と中村信齋であった。

この信齋にいたっては、過去さらに明らかめられたことがない。著作が何かのリストに載せられること以外、これに言及したものをみるのは、次の二件くらいである。

森銑三は「細井広沢」（『書苑』昭和十六〜十七年連載。森銑三著作集第四卷所収）において、広沢の随筆『続大八

録』（写本、所在不明）の中の、志村楨幹に関するくだりを紹介したが、その中に楨幹の信齋門下だったことが見えるのである。筆者もまたこの記述によって風浪の名を初めて知った。孫引きになるが引用してみる。

昔知慎が友楊州と号するあり。信齋【旧号風浪、又号霞洞】門人にして、博雅の人なり。不遇にして一生を終たり。故羽林君【柳沢氏】に仕へて、国君の前に候する事知慎と同列たり。卒後其弟子来りて、碑碣の文を問侍る。又其一代の詩文をもて来る。中に此作あり。知慎これを見て楊州一代の行状なりとて、此詩を碑面に鐫て銘とす。

志村楊州【名貞幹、一名包、字道甫、姓橘、神宮氏】官舎竹瓦廂扁曰。吾形維眇。吾室乃寬。吾驅疾病。吾心平安。幸霑俸祿。突亦不寒。惡妾醜兒。擁膝坐圜。薄酒麤茶。坐帶笑看。種梅愛花。喜美食酸。曉色来幌。夢覺更殘。箇中之興。独自成歡。君恩如是。只如是觀。

老友年々になくなりぬ。太原のかなしみ、まことにしかり。

（一）内は原文割注

この記事を紹介した森も「楊州の師事した信齋といふも、また私等の耳にもない学者である」としている。

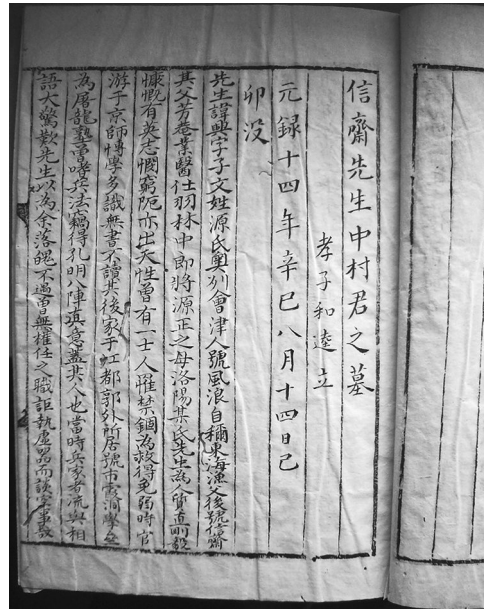
その後、筆者も近世初期漢詩史を考えるうえで、信齋の詩の面白さが気になり、それとなく心に懸けていた人物であったが、既にそれとは別の視点からかれに言い及んでいたのが、故日野龍夫である。日野は江戸の初期林家の周辺、林読耕斎、林梅洞、人見卜幽、人見竹洞らにみえる老荘思想の浸透を指摘しつつ、在野にもそれが広がっていたらしいことの例証として、中村信齋の「読荘」詩を引いたのであった（「近世前期の江戸詩壇」、初出「日本文学」第二十五卷九号昭和五十一年九月。日野龍夫著作集第一卷所収）。しかも「民間にあつて、信齋自身の言に從えば貧窮の生活を送っていたので、世を憤る念からする『莊子』への共鳴は、林家一門の人々より痛切な印

象がある。林家一門の『莊子』受容には、憤りという要素はなかった」（前掲論文）という図式で比較している。楨幹は才備わっていたにも拘わらず、広沢の紹介した碑銘から察するところ、病身のゆえをもって世に名を残さなかったふしがあるが、その師の風浪散人また文学史上に消えていったのは、日野の指摘するような莊子的隠逸志向がもたらした、自然のなりゆきだったのか否か。筆者にはいまだそれに回答できるほどの準備がないもの、その存在が当代江戸詩壇においていささか異彩を放っていたがために、傍流として一隅に押しやられていたことだけは言えよう。加うるに、今にいたるまでその簡単な履歴すら判然としないことも、かれが忘却された一因といえるかも知れない。

佐賀県鹿島市祐徳稻荷神社には、肥前鹿島藩主の旧蔵書中川文庫を蔵しており、その中の一写本に、志村楨幹の撰文による中村信齋の墓碑銘が記されている。本稿ではその本文を掲げるに併せて略註を加え、今まで光のあてられなかった風浪散人像闡明への端緒としたい。

ここに底本として用いたのは、中川文庫蔵、共紙表紙左肩に「御製惺窩文集序／惺窩先生系譜畧／信齋先生墓碑銘」と打ちつけに墨書された写本一冊（美濃版、黒色十行白口上下黒魚尾木版罫紙）である。さらにその上に厚紙の覆表紙があてられ、肉太の墨書で元表紙と同じ文字が書かれているのは祐徳本の通例。印記は共紙表紙右肩に「中川／文庫」の大きな方印（朱文）と、本文第一丁下部に「西園／翰／墨林」の方印（朱文）が捺され、第四代藩主、鍋島直郷（二七一八〜七〇）の蔵儲にかかっていたものと判断できる。識語の類は一切ない。

藤原惺窩関連の二文は、前者御製惺窩文集序は、慶安四年、儒をよくした後光明帝の漢文序で、後者惺窩先生



信齋先生中村君之墓

孝子知遠立

元禄十四年辛巳八月十四日己

卯没

先生諱學字子文姓源氏與列會津人號風浪自稱東海濱後從信齋
其父若春書醫仕羽林中即將源正之母洛陽某氏先生為人質直剛毅
慷慨有英念憫窮厄亦出天性嘗有一士人羅禁錮為救得免當時官
游于京師時學多識無書不讀其後致于江都郭外居號市雲浦學益
為屬龍臺嘗嗜兵法竊得孔明八陣真意蓋共人也當時兵家者流與相
語大驚歎先生以為余落魄不遇當無怪之賦詠執麈尾而談事致

系譜畧は享保二年の外冷泉家藤原為経による漢文。い
ずれも享保板『惺窩先生文集』に所載の文であり、こ
こでは省略したい。これら堂々たる文章に、一介の町
儒者であった信齋の墓碑銘が肩をならべるありさまは、
少しく均衡を欠いた感もないではないが、そのこと自
体、この祐徳写本が弟子の志村楨幹の手沢本の系統か
と想像させられる点でもある。敬慕する先師の墓碑銘
であれば、儒家の栄光をになった縉紳の文章と併記さ
れていても違和感はなかったであろうし、後述するが、
直郷旧蔵本の中には楨幹の著述がほぼ同様の野紙と書
式で、他にも一、二部残存するからである。

ただしこの墓碑銘は、同じく祐徳稻荷神社に蔵される楨幹の詩文集『江武高儒楊州先生道甫三上吟』（写本一
冊、以下『三上吟』と略す）にも、未定稿の形で見える。この『三上吟』との異同は、後の略註で指摘することに
して、まずは底本に一字の増減なく、句点のみ新たに施して本文を掲げておこう。

信齋先生中村君之墓

孝子和達立

元錄十四年辛巳年八月十四日己卯没

先生諱興。字子文。姓源氏。奧州會津人。號風浪。自稱東海漁父。後號信齋。其父芳菴業醫。仕羽林中郎將源正之。母洛陽某氏。先生為人質直剛毅。慷慨有英志。憫窮阨亦出天性。曾有一士人罹禁錮。為救得免。弱時官游于京師。博學多識。無書不讀。其後家于江都郭外。所居號市霞洞。學齋為屠龍塾。曾嗜兵法。竊得孔明八陣真意。蓋其人也。當時兵家者流與相語大驚歎。先生以為。余落魄不遇。曾無權任之職。詎執虛器而談空事哉。遂謝客。絕口不談說兵。惟聚弟子。討論經史。遊其門者若干人。先生常患學者溺時文習俗。密勿採頹風。遂成一家之言。嘗曰一生文字。竊託東坡。天和壬戌。韓客來聘。先生雖不相見。然唱和往復。韓客大服。後游事某侯。直言規戒。大多所裨。平生甚愛梅花手栽吟咏逍遙。先生生于寬永辛巳九月。没于元錄辛巳八月。嗚呼哀哉。享年六十有一。臥病曰。死安宅猶歸也。將終援筆。題曰。

人間六十年 推去太愴忙

今日風光訣 明朝南面王

歷三日而葬郭西廣岳禮院。所著將畧傳授抄。本朝名將傳。風浪前後集并續集。生男二。長和達。次正知也。

門人 志村楨幹 誌

以下、碑文から本文のみを取り出して、節を分けつつ愚按を差し挟んでゆく。

先生諱興。字子文。姓源氏。奥州會津人。號風浪。自稱東海漁父。後號信齋。

(先生、諱興、字子文、姓源氏、奥州會津の人なり。風浪と号し、自ら東海漁父と称す。後に信齋と号す。)

『三上吟』では「号風浪」を「初号風浪」に作る。いずれにしても先に風浪を名乗っていたことが知られ、先に引用した広沢の『続大八録』で風浪を「旧号」としていたことも符合する。信齋なる齋号使用は知命の年、元禄三年の初春からのごとくである。現在残る彼の著作類の署名には、次のようにある。以下からして、中年より姓を仲村と表記するようになったらしい。

『風浪紀行』(延宝五年跋刊) 「中村興」

『扶桑名将伝』(延宝五年刊) 「中村興」

『風浪集』(貞享元年刊) (署名なし。天和の朝鮮通信使との唱和中には「野逸 仲村興」とある)

『風浪後集』(貞享五年序刊) 「仲村興子文」

『霞洞集』(元禄四年序刊) 「仲村興子文」(序を「信齋自叙」と題す)

最後の詩文集である『霞洞集』は、集中に散見する年記から考えて、ほぼ『風浪後集』以後の作が収まっているようであるが、その巻三に元禄三年正月作「花有信詩序」なる文が七絶一首とともにあり、そこに盛方院なる医師から「風浪」を改め、「信齋」号を与えられた事情が述べられるので引いておこう。

大医翁盛方院。嘗憐僕不偶曰。尔風浪之号。殆非吉語乎。宜革之。僕曰。自放於江湖。願終此生。先是偶然有此号。今家次上農。耕無二頃。骨肉雖存。命僅如綫。將求一官於四方。而代此耕勞。請以吉号開僕先途。

翁曰。聞旧臈尔所夢詩云。月添千界色。雪帶十分明。不遇梅花識。一度失風情。時今正月半。梅花方報消息。且余所字子信也。以尔所夢与余所字。号曰信齋。僕得之大悦婦。(以下略)

すなわち風浪の夢に見た梅花信と、盛方院の字子信とにちなんで付けられたというのであった。この五十の齡にしてかれはまだ、世間からは不遇と見られていたのである。

では初号の方はどうだったのか。最初の著作『風浪紀行』の書名の由来を自ら記した巻末識語(延宝五年正月)に「時偶有一夕夢風浪之字也。是以浪名曰風浪紀行也。其於字義。則僕亦未知焉」なるいささか無責任な、しかもやはり夢に因む記述がある。恐らくこれを契機に以後、自ら風浪と号したのであった。同じく自ら号した東海漁父については、『風浪後集』(貞享五年序刊)巻二に、その意味する所を暗示する七絶二首がある。

東海漁父【自号】

四時白浪四時秋 一釣青竿一釣舟 勿謂魚鰕生計笑 三千六百是虚鈞

李白云。広張三千六百鈞。夙期暗与文王親。

又

曾聞獵者獲非熊 尤識漁人釣是公 自此江村一蓑笠 尚吹千古渭陽風

しかしなんといってもこのくだりで注目すべきは、会津出身であるとの記載であろう。東奥の出身であることは詩文集からうかがえていたが、ここではっきり会津の人であることが判明するのである。

其父芳菴業醫。仕羽林中郎將源正之。母洛陽某氏。

(其の父芳菴、医を業として、羽林中郎將、源の正之に仕ふ。母は洛陽の某氏なり)

その会津の出である理由は、かれの父芳菴が医師として会津の保科正之に仕えていたからであった。「羽林中郎將」の「將」は衍字か。『三上吟』ではこの部分がやや詳しく、「其父九八郎。仕黒田侯。後業医号芳菴。仕会津中将源正之。母洛陽某氏」となっていて父の俗称九八郎と、会津以前に黒田家に仕えていたことが分かる。医学は黒田を辞して後に会得したものであっただろうか。ただしこのいずれの件も傍証する資料を持たない。会津藩『家世実紀』(吉川弘文館版)などを通覧するかぎり、この父らしき人物を認めることができないのである。

京都生まれの母についてはさらに分からない。『風浪後集』巻三にある「志村妣平松氏墓碑銘」は志村楨幹の母の墓碑銘であるが、その中に楨幹二十二歳の本年に自分の母もまた亡くなった旨が見える。しかし楨幹の生没年が明らかでないために、これが何年にあたるのかが特定出来ない。ただこの『後集』所載の墓碑銘は貞享二(三年)作が多い。この「平松氏墓碑銘」もまたそれらと同時期の作とすれば、貞享二年として信齋四十五歳、母の死もこの年代ならばそう不自然でもない。信齋はそこで「余母之生也。苦辛惟半而。不能奉一日之樂」と、最

後まで苦勞をかけたことを悔む。

先生為人質直剛毅。慷慨有英志。憫窮阨亦出天性。曾有「一士人懼禁錮。為救得免。」

(先生人となり質直剛毅、慷慨英志有り。窮阨を憫むことも亦た天性に出づ。曾て一士人有り、禁錮に懼る。為に救ひて免を得)

『三上吟』では「憫窮阨…」以下を「曾有一士人。懼禁錮。先生為救得免。恵孤独。仁愛亦出其天性」とする。そして「曾有く得免」の十四字が挿入の形を取っている。惜しむらくはこの「一士人」を救ったというエピソードの出処ないし詳細不明。信齋の直話によるものか。

弱時官游于京師。博學多識。無書不讀。

(弱時、京師に官游す。博學多識、書の読まざる無し)

『三上吟』では「官游」を「游学」に作る。会津藩命による京都留学であつたと思われる。その精確な時期は未詳。『霞洞集』巻四には、青年時に京五条天神社で悪病を除くオケラ餅を戴く風習を見て、中華の遺風だと観察したことが回想される(「朮餅」)。その京都遊学時代に培われたらしい博學多識ぶりは、たとえば諸書からの抜書による随筆(この部分は本書巻四く五に相当し、もと「筆林」と呼んで独立した雑抄であつたらしい)や、前半掲

載の詩文にも出典付記の多い『霞洞集』には次のごとき書名が見られる（出現順。原文ママ。（ ）内宮崎補記）。

韓非子 莊子 魏志 詩経国風 易経 李卓吾先生（著作） 老子 左伝 礼記 北史
桂海虞衡志 弱浦菅廟碑（藤原惺窩） 武備史 楊誠齋詩 唐書 輟耕録 本草 淮南子
戒菴漫筆 遂昌雜録 七書 薛俊日本寄語 翰墨志 書断 陸子淵書輯 宣和書譜 筆談
（以下「筆林」） 東坡（文） 観音経 陳后山詩 呂氏春秋 贊寧笱譜 山谷詩 百川学海
升菴（文集） 三体詩 葦航紀談 漢書 山海経 諾臯記 吳越春秋 列子 穀梁伝 杜
甫詩 書経 居家必用 吳中歲時記 太平広記 太平御覧 珊瑚詩話 歲時記 蒙引
説文 貴耳録（貴耳集か） 師古 鶴林玉露 春風堂隨筆 五燈会元 戦国策 冷斎夜話
後漢書五行志 国語 職原抄 三余贅筆 齊東野語 庚巳編 快雪堂漫録 胡氏雜説 丹
鉛雜録 書肆説鈴 碧里雜存 聴雨紀談 宦遊紀聞 駒陰冗記 委巷叢談 暖姝由筆 金
台紀聞 觚不觚録 震沢長語 菊坡叢語 綠雪亭雜言 戲瑕 塵余 談剩 今言 菽園
雜記 客坐新聞 中洲野録 長安客語 甲乙剩言 五雜組 史記 真臘風土記 王建宮詞
琅邪代醉 説纂 続文獻通考 帰田録 燕翼貽謀録 懶真子録 伝信記 春明退朝録 夷
俗記 翦勝野聞 明紀 否泰録 彭公筆記 玉堂漫筆 双槐歲抄 尊俎余功 公余日録
意見 識小編 子元案垢 西樵野記 維園鉛摘 攬菴微言 蓬窓統録 已瘡編 博物志
水南翰記 投甕隨筆 二酉委譚

もつとも右の書目には、類書からの間接受容も混じるかと思われる、その一々の吟味は他日の課題としておかねば

ならない。とにかく経史の本道よりは、随筆雑著の面白い事物について目が行く型の人物であったことは間違いない。日本の和語や風習と、中華の記録とを結び付けようとする志向も散見するが、それは近世前期における儒者の随筆に特有の特色でもあった。

其後家于江都郭外。所居號市霞洞。學齋為屠龍塾。

(其の後、江都郭外に家し、居る所を市霞洞と号し、学齋を屠龍塾となす)

『三上吟』では「江都郭外」を「武州江都廓南」とする。『風浪紀行』『扶桑名将伝』の延宝五年の時点では、自宅を「翠軒」と称しているが、それがこの市霞洞の前の家を指すものだろう。元禄四年の『霞洞集』には「余が旧居」なる表現もあるから、一度転居したことは確実である。信齋は天和二年十二月二十八日の大火に遭って、『風浪後集』巻三にはその罹災の様相を描いた「失火」詩と引語が収まるが(信齋は「十一月廿八日」とする)、その引に「余所居。浜於南江。距於火所殆十里許」というから、天和頃は品川あたりに居を構えていたか。また同じく『風浪後集』巻二に「市霞洞」と題せる七絶あり。

市霞洞

宅浜南浦魚為米 貨別東場民算緡 往々来々織如綺 却嫌丘壑表幽人

ここから察するところ天和期の自宅が、江戸の南浜に位置する市霞洞であったと思われる。東海道の喧騒が聞こえてくる、けっして閑静とはいえぬところに市霞洞はあった。屠龍塾の名は『風浪後集』の自叙署名に「貞享戊

辰年書于屠龍塾」とあるのが初出か。『霞洞集』卷二には、正月二十八日（年未詳）に塾生らと「送窮鬼」の詩会を開いたことが見える。市霞洞の家塾を屠龍塾と称したものとみてよいだろう。

曾嗜兵法。竊得孔明八陣真意。蓋其人也。當時兵家者流與相語大驚歎。先生以為。余落魄不遇。曾無權任之職。詎執虛器而談空事哉。遂謝客。絶口不談說兵。惟聚弟子。討論經史。

（曾て兵法を嗜む。竊かに孔明八陣の真意を得るは蓋し其の人なり。当時の兵家者流、与に相語りて大いに驚歎す。先生以為らく、余、落魄して不遇、曾て權任の職無し、詎んぞ虚器を執りて空事を談ぜんや、と。遂に客を謝し、絶えて口に兵を談説せず。惟だ弟子を聚めて、經史を討論するのみ）

『二上吟』では「真意」に併記するかたちで「蘊奥」と記入してある。また「當時兵家者流：」の一文が後補のかたちになっていて「當時兵家者流与相語大屈服」とある。ただしどこに挿入すべきかが判然としない。また「絶口不談說兵」が「中年口不復說兵」に、「惟聚弟子。討論經史」が「惟聚徒弟。日談經史」となっている。

この逸話の事実関係は傍証しようもないが、楨幹がここを記すにあたって拠りどころとしたのが『霞洞集』卷三所収の文「与南函南序」（南函南に与ふるの序）であつたらしい。その冒頭。

不佞昔。青年嗜兵法。遇新戦即函。遇古陣即講焉。久而初知。古有節制之師也。雖然。不佞落魄不遇。而曾無權任之職。詎執虚器而談空事哉。遂謝客。絶口不復言兵矣。函南足下。志学遊余門。而日日討論經史。自十七八旁読兵書而勉焉。屈指十年往矣。可謂苦学篤志竟有得者。（以下略）

権任の職につくこと叶わざるがゆえに、兵を語することを止めた師の志を受け継ぐがごとく、七書研究に邁進した門人凶南の様子が、碑文では弟子たちとの経史考究の描写に模様替えされていた作文の過程が分かる。

遊其門者若干人。

(其の門に遊ぶ者は若干人なり)

『三上吟』では「遊」の後に助字「于」あり。信斎の門人は志村楨幹を筆頭として数名がその集に名を連ねるが、かれの収入の寡なさから想像されるように、確かに人数はそう多くない。しかもその素性は殆ど明らかでない。一番弟子の楨幹からしてその行状の杳として知れない人物で、先に引いた細井広沢の述懐はきわめて貴重な証言であった。しかしここに楨幹自身による自己紹介の記述があるので、この場を借りて引いておく。『幹栄文翰』(美濃本写本一冊)は、この碑文と同じく祐徳稲荷神社中川文庫蔵本。同様の黒色十行野紙に写されたもので、識語の類は一切ないが、これも鍋島直郷の命による祐筆写本か。内容は志村楨幹が長崎に赴いた際、長崎大通詞林道栄(一六四〇〜一七〇九)と、面晤にともなうて交された漢文体往復書簡集であるが、残念なことに各書簡の年期がまったく記載されていない。林道栄が初見の喜びを詩に書き送ったものに楨幹が文で応じた事が、書信往来の端緒となったのであったが、自己紹介を兼ねた楨幹のその第一書から一部を左に示す。

(前略) 僕姓橘。族神宮寺。名包。字道甫。号楊州。又称楨幹。四世祖。仕甲陽幕下。知信陽志村郷。因以爲氏云。吾翁下民間。陸沈医家。茲行陪。大村刺史。徧蓋山海大觀。畧費風雲。字未脱稟。不呈梧下。(以

下道栄詩に次韻できなかつたことをわびる。下略)

署名宛名は「晚進橘包磐折拜具／奉呈／官梅林豊梧右」とある。道栄が官梅を姓として使いはじめたのは元禄十二年以後とされ(宮田安『唐通事家系論攷』長崎文献社昭和五十四年刊)、ここではまだ号として呼称している所からして、この書翰もそれ以前のものか。楨幹が大村純長に仕えた在国の大村藩儒であった事は従来『日本教育史資料』(文部省明治二十三年刊)に元禄六年七月以降、城中にて論語を講じた旨が出ている(そこでは「藩士志村三左衛門ヲシテ」とあり)事などで知られていたが、これはそれを裏付ける。ただし、柳沢家仕との時期的な違いや関連性はまだ明らかでない。ただし本国甲斐国、また信濃志村郷を領していたことから志村姓としたことが、ここに始めて明らかとなった。本姓を神宮寺といったのは、広沢の回想中という「神宮氏」の正しき称であろう。林道栄も純長の恩顧を受けていたので、両者の会見が実現したのも侯の周旋であろうし、楨幹が実際に崎陽の地を踏んでいたことも、これによって初めて証される事実ではなからうか。また、楨幹は『薈叢漫筆』なる写本一冊の随筆も中川文庫に残している。但しここでは著者名「橘時包」となっていて、諱は本来時包、修して包としていたのであった。中華諸書からの雑抄で、長崎仕込の感ぜられる内容だが、これについては他日に期す。

さらにここで『風浪後集』巻一の末尾を飾る「寄示諸秀才并引」(七絶一首)を、楨幹以外のかれの門生を窺うようがとして示しておこう。これは借金がかさんで返済不能となった信齋が、遂に金主から訴訟を起こされ、土地建物の殆どを差し押さえられた際、塾中の門生らが恐らくは贖金して師の危機を救ったという一件が述べられる。こうしたことを恥とも思わず詳しく自著にさらけ出し、むしろそれによって弟子たちの義侠心を不朽のものとしようとするところが信齋の信齋たるゆえんであった。塾生たちがたどころに決起して難を退けたのも、

師のそうした愛すべき性格への敬慕のあらわれであつたに違いない。その引語の前に列記された「諸秀才」二十人の名号は、これが総てではないかも知れないが、貞享期の門人たちの一覧として見ることが可能である。楨幹の名がないのは、かれがこの時すでに仕官して師の近辺にいなかったことを示していよう。

寄示諸秀才并引

松氏韶夔憐

南氏秋毫罔南

藤氏璉成器

松井氏清藻雪

香下氏藁梅龍

浅賀氏魚沈鱗

桃井氏至百川

积氏嘯雲

高木氏蓮七沢

沢田氏白西山

西林氏音希声

青木氏輅淳朴

北島氏楡富春

国氏允伯升

大室氏族東川

市井氏恠信夫

白檀氏柄萬年

大西氏時蛾子

大西氏必晞江

村井氏亨秦川

余曾就質家貸金。既而家業愈衰。不能償之。質家收債而不休。遂訟於官。平生所居一畝之宮。殆没於質家。塾中諸彦。匍匐排難。倉卒解紛。實足謀數年之安。蓋朋友雖有通財之分。腐儒愧無報德之姿。不堪感激。僅裁一絕示意。因求其和。

売文為活本多癡 令室倒懸今斛斯 不頼諸君來市義 一家從此殆流離

杜。聞斛斯六官未歸詩云。本売文為活。翻令室倒懸。

先生常患學者溺時文習俗。密勿拯頽風。遂成一家之言。嘗曰一生文字。竊託東坡。

(先生、常に學者の時文習俗に溺るを患ふ。密勿して頽風を拯さんとし、遂に一家の言を成す。嘗て曰く、一生の文字、竊かに東坡に託す、と)

『三上吟』では「密勿」の前に「倍」字あり。また「託」を「托」に作る。信齋の文辭に蘇東坡の影響は明らかに見られるが、この前半のくだりは、文学表現は別として、貧苦にあえいでいたかれが必ずしも老荘の虚無に耽溺するような人物ではないことを示しているだろう。ただここだけ読むとリゴリスティックな道学者流にも思えるが、碑文の最初の方に「窮阨を憫むことも亦た天性に出づ」のくだりがあったように、弱者救済をはじめとした仁政を理想としており、「法」を厳守するがために窮状を見捨てるごとき、いたずらな法治国家となることに對して批判的であった。かれの思想をここに分析する紙幅はないが、口先には老荘の味わいを多分に含みながらも、現実生活の動態や細部を坐視できない、きわめて陽明学的な性格をもった宋学者といっておいてよいだろう。『風浪後集』卷三所収の「擬对策」に「経國の要は教化を以て本と為す。教化の始めは窮民を以て最と為す。刑法と雖も偏廢すべからず。豈に教化人に淪なるの深きに若かんや。文王の治たる、人々をして各おの其の老を養ひ、其の幼を恤むなり。不幸にして鰥寡孤独、父母妻子の養無きときは尤も宜しく憐恤すべしと。故に必ず以

て焉れを先んず」(原漢文)と。

天和壬戌。韓客來聘。先生雖不相見。然唱和徃復。韓客大服。

(天和壬戌、韓客來聘す。先生、相見ずと雖も、然して唱和徃復し、韓客大いに服す)

『三上吟』では「先生」以後が「先生雖不覲面。徃復酬答。韓客大服」となっている。この天和二年壬戌の韓使との贈答は、『風浪集』巻下の冒頭から、先方の詩文も織り込みつつかなりの紙数を占めており、信齋の著作中でも目立つものとなっている。しかし信齋は遂にかれらと直接あいまみえることはなかった。かれの「書唱和後」(『風浪集』巻下)をパラフレーズしつつ、その経緯を並べてみれば次のごとくになるろう。

かねて通信使に会見したく思っていた信齋は、一行がいよいよ江戸に入ろうとする八月十三日から藤沢で待ち構えていた。六日を経て八月十九日薄暮、韓客一行は藤沢の宿に到着。さっそく刺を懐にして宿に赴き、学士らとの会見を求めたが役人はこれを聞き入れず、あきらめきれぬ信齋は、恐らくは以酌庵の長老に随行していた対馬西山寺の僧「常師」、これは随員金指南(訳官)の日記『東槎日録』によつて、梅山玄常なる西山寺の住職であつたことが知られるが、この僧の宿所に赴き、その仲介によつて随員の学者たちへの面会を求めたのである。信齋とこの僧との、これ以前の交流については知るところがない。師は歓迎してくれたが、夜も更けていたので今すぐにはいかんともしがたく、左のごとき刺(自らの素性を書き添えた贈詩稿)を託して、この夜は自分の宿に帰ることにした。

奉 朝鮮国 大学士 左右

野逸 仲村興

蓬島平波漢使船 西風靡節越三千 相迎郵上欲題句 道路唯称司馬遷

僕東武野人也。姓仲村氏。名興。字子文。自号風浪散人。所居称市霞洞。学斎称屠龍塾。齡及不惑。未嘗仕官。常以舌耕為業。夙聞 大国 学士之風綵。不任瞻恋矣。從官使來此馭。猥獻家帚一卷於 左右。以助一粲。幸惟不吝教諭。而俯假數字之判。則珍重何啻九淵之珠哉。偏欲慰平生之落魄矣。 左右到武府之日。將候起居於旅館。故一二腐語。恭充名刺。以達寸衷焉。仰冀海函。

ここではまだ、だれが学士として来ているかを知らないので、宛名は「大学士左右」と記すのみ。それにしても齡不惑を越えてなお続く自らの「落魄」を、初見を求めようとする人に吐露するのも変わっている。此の時信斎は四十二歳であった。

明朝、一行は早く藤沢を出立していたので、信斎もまた後を追うようにして出発し、一行より先に江戸に帰り着き、江戸での滞在先であった清澄の本誓寺にかれらの落ち着くのを待ったのである。そして一行が旅装を解いたころ、再び公館に玄常師を訪ね、学士との仲介を求めようとしたが師は不在、信斎はその日もむなしく帰らざるを得なかった。数日して再び訪ねると、館主に一封書を残して早々に対馬に帰ったという。封の中には学士として来日した製述官成琬（進士、字伯圭、号均館、海月軒、月翁、翠虚居士など）の次韻詩に僉正洪来叔（字世泰、号滄浪居士）の添えた題詞の書かれた次掲の詩箋が入っていた（九月二日付）。天和三年刊行『東使紀事』によれば、成琬は昌山の人、このとき四十四歳である。

走次 野逸公 示韵

滄波遠泛木蘭船 客到蜻洲路幾千 刮眼新詩翻入手 始知詞苑漏鶯遷

季秋初二

翠虛

書詩卷之後云

南天九月雪飛花。為有卷中千首陽春歌。

壬戌季秋

朝鮮国

滄浪子書

江戸ではさらに国禁きびしく、官許なしに会見するなどできるはずもなく、その間信斎は朝鮮通信使らの江戸での活動を、手を拱いて見ているしかなかったのである。九月十二日、韓使一行がいよいよ帰途につく。あきらめきれぬ信斎は、当日足疾がひどかったこともあって一計を案じ、後を追うように使節が泊る神奈川の宿に詩二首と、それに添えるに、成洪二氏あての扇二本を送ってみた。

疇昔。西山寺常師留別之章。落手啓函。両学士見惠之高辞也。吟誦數四深感。豈翹海已耶。僕何不幸哉。昨者雖到藤沢駅。而予有国禁不能通言。今者雖開執調路。而偶嬰足疾不能往拜。空用前韵奉答謝焉。遂不自量。白箆各双柄。恭充束脩。以猷因兼祝西路萬里之行。伏冀笑納。

孤身是似不雜船 自逐高風無遠千 安克追隨成學士 雞林地畔拳家遷
三島悠々三韓船 清波濁浪定斯千 何逢詞海洪才子 激起枯魚乍變遷

不得達諸本誓寺。今朝発一丁致寸心。誤賜回章。行李在于金川藤沢両駅之際。

はからずしてただちに成翠虚から答書が来た。嬉しいことに、そこには信斎について最大級ともいえる贊辞が連ねてあったのである。

謹謝 仲村公

不佞入 東都。所接賢士大夫幾至數百余人。先唱後唱。金石相奏。至其春容大篇寂寥短章。有如荊潭之填篋。衆作亦至千百余首。而於其稠人広坐之中。窃聞当世詞林第一等之奇才碩人。咸以 仲村公博識通才掉鞅於翰墨場中。得与木順菴林整宇藤士峯鶴山及一松震沢諸公。相為頡頏於藝苑云。不佞準擬一遇 仲村公。叩其玄闕。踴聞郢中之高唱。而拘於 國制。竟違望履深切衷悵矣。今以返棹夕至鹿川。不料華翰帶清詩而來。又從以便面二把賁此行驢。此誠不世之高裁。足令人驚動。底事也。忙手開械披讀再三。如对 芝眉蒙其軟語之津々也。遂步 瓊韵。兼謝贈箋。

兩箇清風至客船 一篇佳句重金千 何由与子芳隣比 喬木聊期谷鳥遷

壬戌季秋

朝鮮國製述官成碗伯圭翠虛居士 走稿

洪滄浪適以病臥。從後西京往來途中。送答為訓云々。

もとより信使に共通した外交的褒辞であったが、信齋はすぐさま次のごとき再答書をしたためた。その文面にはかなしいまでに素直な喜びが躍り出ている。

奉 成学士 侍右

僕曾閱 貴大國權学士李石湖之文辭於遺稿。意甚偉之。終食之間。未嘗不在鉅鹿也。是歲壬戌之秋。適停紫蓋於東武本誓寺。僕何厚幸而遇此良會也。而草莽之士於高門。如天如帝。安得俄頃遂披雲也。尚頼一擔常師之慈惠。而得達鄙詞於坐右。相統而忝被惠如夏楚之教諭焉。何能使蓬心穢腸得蕩滌於筆硯之間哉。且辱猥蒙 大邦之品題。而今而後。期為一邦之佳士耳。可謂吹噓之妙。一肉於白骨。文陳之雄十倍於曹不矣。

昔敝邑之大拙翁。与 貴国之權学士唱酬於西京本国寺之次。不任感歎乃記曰。吾邦之騷人墨客。誰獲当其詞鋒哉。誠乎詞林之蔚乎。雖施諸中華可也。而況敝邑乎。始知大拙翁之不謙吾儕也。回轅之后。不堪遙憶。晨昏西望。聊修短楮。萬惟炤亮。

倚樓數暮鴉 行客人誰家 布帆定無恙 風師護返棹

前聞 洪先生有霜露之恙。震艮今如何。恐煩 視聽故不奉書。

ここで唱酬は終わる。その後洪滄浪の書が到来した形跡はない。

後游事某侯。直言規戒。大多所裨。

(後に遊んで某侯に事ふ。直言規戒、大いに裨する所多し)

『三上吟』には「直言規戒」の前に「平生」の二字あり。この仕官のことは延宝五年の『風浪紀行』から元禄四年二月の自叙のある『霞洞集』まで、かれの著作に見えない。よってそれ以後の、ほとんど晩年にかかる出来事だったのであろうか。ただ、かなり後世の記述で傍証の必要あるものの、戸田乾吉著『久留米小史』(明治二十八年十二月觀文社刊)の、藩主累代の「文学」(儒者)の記述の中に「慈源公ノ時、中村信齋ヲ聘シ月俸三十人口ヲ賜フ」とある。慈源公は第四代久留米藩主有馬頼元で、在任期間は寛文八年から宝永二年(一六六八〜一七〇五)だから、信齋の後半生と時同じい。かれは久留米藩士中村又左衛門正直(延宝五年卒八十四歳)の四男正恒と知己の間柄であり、正恒は他家に就職した兄たちを差し置いて有馬侯臣として家督を継いでいたので、「中村

氏行状」、『霞洞集』卷三所収)、或いはこの関係がはたらいたものか。もしこれが事実であったならば、たとい三十人扶持の賓師でも、例の堂々たる態度で、自宅に程近い芝赤羽の久留米藩邸に伺候していたことであろう。

平生甚愛梅花手栽吟咏逍遙。

(平生、甚だ梅花を手栽して、吟咏逍遙するを愛す)

『三上吟』ではこの部分かなり詳しく描写されるのでそのまま引用しておく。「平居。甚愛梅花。所居手種梅樹数株。号霖花巷。吟遊其下。或倚杖徐步遊寺院。山林逍遙。自得恰如浴沂之樂」。この春風駘蕩たる曾点や林和靖流の風姿が、信斎の理想とするところであった。しかしこれは江戸前期の儒者には割合多くみられる嗜好でもある。その集に梅花詩はたしかに多いが、かれの事歴を窺う本稿では省略に従う。霖花巷なる別号はこの記述にしか見えない。

先生生于寛永辛巳九月。没于元録辛巳八月。嗚呼哀哉。享年六十有一。臥病曰。死安宅猶歸也。將終援筆。題曰。人間六十年。推去太愴忙。今日風光訣。明朝南面王。歷三日而葬郭西廣岳禪院。

(先生、寛永辛巳九月に生まれ、元録辛巳八月に没す。嗚呼、哀しいかな。享年六十有一なり。病に臥して曰く、安宅に死するは猶ほ帰るがごときなり、と。將に終らんとするに筆を援り、題して曰く、人間六十年、推去すればただ愴忙たり、今日風光訣れ、明朝は南面の王たらん、と。三日を歴て郭西広岳禪院に葬る)

『三上吟』の時点では生没年記載の体裁がまだ確定できておらず、「生寛永………歿元禄辛巳八月二十四日」と欠字のまま。辛巳は元禄十四年である。終焉の日付は結局墓石側面に大書されたようであるから、最終的に碑文では「八月」とのみ刻して日まで入れなかったのであろう。また墓所広岳院の場所「郭西」が、もとは「郭南荏原郡」と具体的にになっていた。辞世の詩句に異同はない。この絶筆は『莊子』至樂篇にみえる、莊子と髑髏の夢中の問答に拠ったもの。死後の世界から現世に戻してやろうとする莊子に対して、「吾れ安んぞ能く南面の王の樂しみを棄てて、復た人間の勞を為さんや」と髑髏は突き放す。その南面王たらんと從容として逝いた信齋の姿には、やはり死生を超越した莊子の面影も漂っていたといえるかも知れない。しかしながら、一つの意匠としての老荘がはびこっていた近世前期の芸文界で、その各々の、一方で備えた道学臭との折り合いの付け方は、初期の林家一門も含めて更に考えられなければならない日本思想史上の問題である。中世末から近世前期にかけて読まれた林希逸註の老・莊・列のもつ禪的あるいは宋学的側面だけでよく語りうることはない。信齋の作物はその格好の材を提示することと思われる。

所著將畧傳授抄。本朝名將傳。風浪前後集并續集。

(著す所、將略伝授抄、本朝名将伝、風浪前後集并びに続集あり)

『三上吟』では、「所著有將略伝授抄。本朝名将伝。風浪前後集。霞洞集并続集」と、『霞洞集』が入っており、碑文にいう「続集」がそれにあたることになるか。

このうち『将略伝授抄』が不明。兵学書であることは書名から察することができるが、中年にして兵を語ることを止めた際に棄てられた著作であつたらうか。気になるのは、信斎に盛んに兵書の深奥を聞き出そうとした「島津氏」なる人物に（「与島津氏序」、『風浪後集』巻三）、また、楨幹に続く秀才であつた門下の南凶南が軍書研究に志したときに（「与南凶南序」、『霞洞集』巻三）、いずれも「和字鈔」なる自著を授けている点である。内容としては七書の要諦を仮名に和らげたもののように想像されるのだが、恐らくはこれなどが『将略伝授抄』にあたる一書ではなからうか。同じ軍書でも『本朝名将伝』は、いまでは『扶桑名将伝』（内題）として残存するものに相当しよう。内容は日本武尊から豊臣秀吉までの、日本史上軍務に秀でた人物三十六名の漢文体叢伝。大本二冊で、刊記には「延宝五年丁巳五月、本石町一丁目河岸、本屋七郎兵衛板行」とある。題簽の貼られた本をまだ寓目しえないが、あるいは外題がこの『本朝名将伝』であつたのかもしれない。

『風浪集』『風浪後集』そして『三上吟』にも挙がっていた『霞洞集』、この三書が信斎の詩文集である。しかしこれ以前に『風浪紀行』半紙本一冊があつた。東海道の品川から京までの行程を四十九首の名所詩とカタカナ混じりの本文で描いたもの。『風浪後集』巻二には、これらの詩を改作の形で収め、その題詞中に「予、昔十七八にして京師に宦游す。時に紀行の詩若干首有り」（原漢文）とあるから成立は明暦年間。刊記はないが末尾に延宝五年付けの識語が付され、刊行も同年であろう。ここに見るほとんど戯詩ともいえる諸作の出でくる背景に關しては、南畝銅脈以前の狂詩を考察した際に触れたことがあるので、ここに贅しない（宮崎「国風・詠物・狂詩」、語文研究五十六号、昭和五十八年十二月）。『風浪集』は大本三巻三冊、序跋はなく、最終丁に刊記「貞享元年、五月吉辰、野田庄右衛門」。上中巻が詩で構成は分体、下巻が朝鮮通信使との贈答記録も含めた文である。『風浪

後集』はやはり大本三卷三冊で、巻頭に「風浪自叙」（貞享五年）を置くも、筆者の参照本に刊記はない。巻一と二がほぼ分体の詩、巻三が文。『霞洞集』は大本六卷三冊、巻頭に「信齋自叙」（元禄四年二月三日付）あるも、これまた刊記は見られない。構成は例によつて巻一から二が分体詩、巻三が文。そして巻四から六が「筆林」と題された読書雑抄である。巻六末の自記らしい識語には「筆林若干条。応某人索所筆。皆遠豕之類也。恐受嗤於当世。然尚有取於愚者一得。余悉載在統筆林」というから、この続編も用意されていたと思しい。『三上吟』にいう『霞洞集』の「続集」とは、あるいはそれを指すか。本集における典拠諸書については既に記した。これらすべての板本は、残存の少なさや刊記の様態などから察して、ほとんど著者側の入銀で刊行されたものごとくである。かれの「不遇」とはいかなるものだったのか。

生男二。長和達。次正知也。

（男二を生む。長は和達、次は正知なり）

『三上吟』ではこの部分、「長女嫁于人先歿。男……」と、書きかけとなって終わっている。先に亡くなった娘がいたことはまだ確認できない。またこの男子二氏の行状にしても、皆目つかめないままである。

○

以上が碑文に関する、筆者の覚書的な加註である。

前にも述べたように、筆者はかねてより信斎の諸作を、その狂詩文とも見まがうばかりの自在さによって、漢詩文の表現史的な興味から見ていた。国会図書館鶯軒文庫蔵『風浪集』は大田南畝旧蔵本で（文化十二年五月の識語あり）、多くの書き入れ、たとえば下巻に見える梶原景信なる孝子の逸話（「孝子伝」）には『鶯峰文集』にも採られた旨の指摘があるなどして面白く、学部卒論執筆の最中、国会図書館の閲覧室でこれを初めてみたときは、あたかも南畝と顔突き合わせて同書を品評するかのような幻想に襲われたものである。それと同時に南畝が、江戸中期からみれば狂詩まがいとも取れる信斎の詩をどう感じていたのか、あるいは自らの戯作の糧とした形跡はなかつたかなどと、思いを巡らすに十分な魅力的題材でもあった。文章にしても、『霞洞集』の自序などにみる、異様な自己省察が、妙なおかしみをたたえてなお卑屈に墮さないありさまは、中期以後の狂文の口吻にも似て、しかしまたその粘った感じがどこか違っている。典雅な詩文集の巻頭を飾るにふさわしからぬこの文を、あえて訓読して書き出してみれば、その事はより分かりやすいかもしれない。

蛞蝓（クソムシ）の転を愛する人は、其の臭きに堪へざれども、自からおもへらく蘇合も及ばず、と。東海先生の述に於るや亦た此くの如きか。一篇を生ずる毎に之れを哦し、之れを筆して積みて巻軸を成す。豈にただ哦筆一過して止まんや。之れを彫り、之れを刻して、臭きを萬年に遺さんと欲す。怪しむこと勿れ。前身は是れ蛞蝓にして、今化して臭きを逐ふの夫と作る。然りと雖も易に曰く、同心の言は其の臭蘭の如しと。若し後世、同心の人有らば、ここにおいて六鑿の塵を潦撥して香界臭地、俱に忘れて猶ほ鼻外の香を聞く者有らんか。（原漢文）

それから大学院に進学し、中川文庫の調査に参加した折、偶然ここに紹介した写本中の信齋墓碑銘を見出した。驚いて写真だけは撮ったものの、その後就職して居を東京に移してからは、公務の繁忙にまぎれて放擲していた。昭和六十二年の春日、やっと高輪の広岳院（曹洞宗）墓所を訪ねたが、当時もう墓石は影も形もない。後日お寺あてに手紙をしたため、本当にここに中村信齋が葬られたのか否かを正すべく、過去帳の記載の有無を尋ねてみた。そして広岳院主石井俊雄師からの返書（昭和六十二年五月二十九日付）のご教示により、現存過去帳中、中村家関連の記述は次の三霊のみということが分かった。たしかに信齋はこの広岳院に埋葬されていたのである。

興信^(マ)齊先生了義居士 中村武助 父

元禄十四年辛巳八月廿四日没

榎木貞心禅尼 中村信齊^(マ) 下女

元禄十六年癸未七月十二日没

悟山了心信女 中村武助 母

正徳三癸巳三月廿六日没

了義居士が信齋。この中村武助が長男の和達であろう。下女は信齋の側室か。夫妻二人が相次いで亡くなり、その十年後に妻も逝いたことになる。それではなにゆえこの禅院に葬られたのか。ここが元来菩提寺であったことをまずは考えてみなくてはならないが、この三人だけというのは、それを断ずる証に乏しい。いささか気になるのは、この寺院が鹿島藩第四代鍋島直条の墓所でもある点だろうか。偶然かも知れないが、今回使用した中村・志村の師弟の資料はほとんどが祐徳神社の藩主の旧蔵書中に見出されたものである。しかもそれらすべ

て第六代藩主鍋島直郷の手沢にかかるものであった。しかしながら信齋の著作に鍋島家との関係を示すものがない以上、好字の直郷と、この師弟との間を結ぶ紐帯を、やはり文人として知られ、ここに葬られた直条に充ててみるのは、今のところ付会の誇りをまぬかれまい。この件はまた後日の課題であろう。とはいえ、朶雲賜りながら二十余年の間、それを眠らせてしまった筆者の怠惰を、広岳院の石井師どうかお許しあらんことを。また、なによりも底本の閲覧をお許しくださった祐徳稻荷神社、またそこへの通路を絶えずつけて下さり、ご指導下さった井上敏幸先生に、深甚の謝意を表したい。末筆ながら、朝鮮通信使関連では、九州大学韓国文化研究センター、ならびに松原孝俊教授の御助力を得たことを記しておく。

風浪残塋。長い風露に耐えかねて、東都の墓石は残ソクなわれ、はるか西陲の紙碑に残ソクった。標題はその二意をかけた洒落のつもりである。